

第 25 期日本学術会議健康・生活科学委員会少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会
第 1 回議事録（概要版）

開催日時：2020 年 12 月 19 日（土）15:00～17:00

場所：オンライン

出席者：和氣、荒井、小松、西村（正）、西村（ユ）、萱間、新福、永瀬、森山、山田

欠席者：寶金、山川

（敬称略、名簿順）

資料

- 0 【次第】第 25 期少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会 第 1 回
- 1 【設置提案書】少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会
- 2 第 25 期少子高齢社会におけるケアサイエンス分科会委員名簿
- 3 【公表版】提言「ケアサイエンスの基盤形成と未来社会の創造」
- 4 第 24 期からの引き継ぎと活動案

議題

（1）分科会委員長の選出

以下、推薦され、承認された。

委員長：西村（ユ）、副委員長：荒井、幹事：山川、森山

（2）分科会のメンバー構成について

資料 2 に基づいて自己紹介を行った。

（3）第 25 期の活動計画

資料 1、3、4 に基づいて意見交換を行った。

提言「ケアサイエンスの基盤形成と未来社会の創造」を今後、どのように発展させていくかについて、①学際的であることが十分に伝わるように記載を追加すること、特に、ケアサイエンスに関する研究は各領域で進んでいることから、それらを統合して新しい学術分野とする際にこれまでとは異なるポイントを明確にしていくこと、②対象が広範囲であることからフォーカスを明確にすること、③エビデンス作り（アウトカム）を行うことの必要性、④社会への発信について意見が出された。

ケアの概念について、「隣人の人を思って行動していくことがコミュニティを構築していくこと」「ケアされる側ケアする側とを分離することが人々の生きる力を削いでいるのではないか」「地域でケアを受けることの多かった人々も、他の人に少しでも関心を持って相互

にケアをすることで、一人一人が生きている実感を回復していけるのではないか」「医学、疾病・治療に引っ張られているので、日常生活をどのように保つかの視点も重要。市民プロフェッショナルの議論は、若手アカデミーで発出した「シチズンサイエンス」の議論と関わる。科学と市民との関係を改善していこうという動きがあり、例えば日本心理学会では、市民との共同--彼らも学会発表する、共同研究をする、科学を共創するという考え方も重要ではないか」といった議論がなされた。

焦点を当てていく領域については、コロナ禍によって加速された喫緊の課題への対応が話し合われた。福祉領域での、①引きこもり問題や介護領域の人材不足問題、②高齢者の要介護状態にならないフレイル対策、そして介護崩壊を防いでいく対策について、ケア共同社会を作り上げることの重要性などが話し合われた。

社会への発信の仕方については、教科書の作成、省庁や学会に働きかけること、科研で分野を作ること、多分野かつ市民と取り組む学術であるため、世代を超えた人々やさまざまな専門分野の人に発信していくこと（また、市民と共同すること）、研究成果を出しながら、コミュニティを育てていくこと、初等教育にもケアサイエンスを入れていくことなどが議論された。

以上の意見交換より、コロナ禍で浮かび上がった喫緊性のある課題について、複数回のシンポジウムを開催し、フリーツールなどを用いて社会に発信することとなった。最短で、2月の幹事会にシンポジウムの企画を提案し、4-5月に実施することが可能である。

次回の分科会でシンポジウムの企画書を確認し、1月末、あるいは2月上旬にシンポジウム企画案提出を日本学術会議事務局に提出する予定とする。また、ケアサイエンスの定義に関する議論、及び教科書等の作成については、時間をかけて検討していくこととなった。

【1回目シンポジウム（案）】

：コロナ禍（ポストコロナ・ウィズコロナを視野に入れる）でのケアサイエンスを切り口とした研究等に関するシンポジウムを行う。

- ・24期まとめたケアサイエンスの概要：小松委員
- ・高齢者に関わるケアサイエンス：荒井委員
- ・障がい者に関わるケアサイエンス：萱間委員
- ・アウトリーチ活動。コロナの中で高齢者、中野区など地域での取り組み、外国人の介護士の取り組みなどを検討中：和気委員。

次回は、1月後半に短時間で開催を予定する。改めて日程調整を行う。以上